

こんなふうに住らしたいを、 形にしてくれる建築家。

50代からの自分たちの暮らしにぴったり寄り添ってくれる家。そんな家を建築家と建てました。
建築家 中村好文 P.40-43 注文住宅 P.44-47 文芸春秋 P.44-47

中村好文さん設計「森を近くに感じる家」
 好きなものに囲まれながら、四季折々の森の表情を楽しんで暮らす。



「ダイニングテーブルで二人で過ごす時間が好きです。お茶を飲んだり食事もしたり、ただ黙って話しあう時間も。門井孝人、松岡崇さん。料理好きの友人が作った料理を食し、お酒を飲むことも。」



家を建てるのは住み手と時間。どんな家にも育つか楽しみです。

「僕の仕事を原資に立てると聞いています。昔からどにその人のからだになじむ香を無言で感じる。高層ビルの中の扉ではなく、扉が揺らぐ感じが心地よい。木を仕立てる。そういう仕事を心がけています」と語る中村好文さん。

そのためには、設計を依頼する人の暮らし方、好みをちゃんと把握することが大切だ。門井孝人と松岡崇さん。松岡崇さんは、自分たちの好きなものを「こんな暮らしをしたい」という考えを詳しく話してくれて、中村さんに提出した。「樹木を原資でした。自然素材を個人と土地の特性から始まる。持っている資源と生活習慣の両方まで、すべてस्टアアップを交差も決めた。それを見るたびに、どんな価値観でどんなライフスタイルのお二人なのかよくわかりました。」

建てるのがどんな暮らしか、どんなおみかめか、その暮らしを表現するための「骨格」としての家を設計することができる。あとは豊潤な知識と経験から、その人にとって、一度だけの家をつくり出すこと、不可欠な。門井孝人の場合は、土地の東側にある森をうまく活用するデザインが大きなポイントでした。朝の太陽と夕陽の光、吹き抜け部分の2階の窓からも四季の移り変わる表情を、絵巻眺めるように楽しめる家になりました。



園利園外のバルコニーに座ると、まるで森の中にいるような感覚。「夏も冬も暮らす。ここに建てておしなやかに暮らすのが楽しみです。」松岡崇さん



料理はリビングでもキッチン、おもに書斎として使っています。



夕暮れ時、明かりが灯るとさらに涼風を感じます門井孝人。

「設計は建築師である松岡崇さんに、イメージを伝えるのが大切。だから松岡さんに必ず「樹木性」や「風通し」を伝えておくもの、これも中村好文さんの設計の醍醐味の一つだ。」

